

The Correspondence of Noboribetsu City Nature Center

登別市ネイチャーセンター ふおれすと鉱山
ニュースレター



えぞたぬき

Illustrated by Hiyama T.

Contents

Vol. 7
Dec. 2003

特集

マッドサイエンティストのつくりかた.....	2
オープンから 19ヶ月の活動報告.....	4
使える小ネタ集.....	5
リトル・ヴォイス～リレーエッセイ～	7
お知らせ&わいるどれしひ.....	8

How to Make Mad Scientist!

マッドサイエンティストのつくりかた

～檜山知弘（モモンガ博士）の思想と起源～



野生動物と視線を合わせたとき、その印象は心深く刻まれて人生をも変えてしまう。檜山はそんな体験をしてしまった人間の一人だ。

それは、人生を変えるくらい鮮烈な体験だったのだ。

10歳くらいのころと記憶している。家族で北アルプスの常念岳を登っていたときのことだ。この山はガレ場（岩の多い所）が多く、オコジョという小さなイタチの仲間や、ライチョウが生息しており、そのことを事前に知っていた僕は、動物との出会いを楽しみにしていた。夏の北アルプスは、当時から訪れる登山客が多いために警戒心の強いオコジョに会える確率は高くない。それでもわずかな望みは僕の心拍数を高く保つのに十分だったのだ。突然、僕の目の前30cmほどの所に小さな可愛らしいオコジョの顔が現れ、その三角形の目は間違いなく僕の目に焦点を合わせていた。彼は不意の僕との遭遇に困惑しているように見えた。彼と目があった時間はおそらく0.2秒程度だっただろう。すぐに岩の間に姿をかくしてしまったが、その時間は僕の心の中で今でも止まつたままだ。

野生動物と目があった経験を持つ人がどれだけいるだろうか。自分の生活空間に存在し得ない動物との出会いは、ただでさえ鮮烈な記憶になる。ましてや、その動物と目が合って、何らかの意志の疎通（たとえそれが困惑や敵対であったとしても）が成立した場合、それは人生の中で忘れられ

ない記憶になりうるだろう（そのコミュニケーションが敵対でなければなおさらのことだ）。

そんな体験があると、動物たちが普段どんなことを考えて生きているのか知りたくなる。どんな苦労をして、何を喜びに生きているのか、人間ですらそれを知ることは困難なのだが、それを理解しようとしていることで、動物たちとのコミュニケーションの幅はもっと広がるはずだ。たぶんそんなことを考えて、僕は野生動物研究のレールに乗ったのだろう。現実には考えていたこととはかけ離れたことばかりしていたのだが、その時の経験が基で僕は今、ふおりすと鉱山に勤めている。

人は死臭を忘れ、死の意味を理解しようとしている。

ある人が、今の子どもの教育に圧倒的に足りないのは「死」の教育だ。と言った。たぶんそれもうなのだろう。

小さい頃、近くの池のある公園で魚取りをしていて、マガモの死体に出くわした。死体はすでに内臓が腐って腹腔が露呈し、何百もの蛆（うじ）が蠢（うごめ）いていた。いつも水をはじいてつやつやしている羽根は汚く汚れ、毛羽立っていた。

幼い僕の心にその光景と死臭は深く刻みつけられた。何日かは食事が喉を通らなかった。これは、僕にとってほとんど最初の心的外傷である。だから、このときからずっと今まで、おそらく20年以上にわたって生きることと死ぬことについて考え続けている。

生きることの意味と死ぬことの意味。 それを動物たちが教えてくれている。

ふおれすと鉱山に来て野生動物を中心としたプログラムや展示を手がけるにあたって、動物の死に様と生き様を見せることは僕の個人的なテーマになった。動物たちの生き方は自分の生き方を映す鏡だ。

死に様は生きる意味を教えてくれる。そのことを通じて自分が生きることの意味や、いずれ訪れる死について考えを向けられればいい。多くの子どもや大人に願うことだ。

今の子どもたちは生き物に触れる機会が極端に少ない。川で魚を捕ると危ないからと怒られるし、虫を飼うと汚いといわれる。ネコを拾ってきても飼う場所がない。自然、部屋の中でバーチャルな「くそをたれない生き物」を飼う羽目になる。僕



はそんなものには一片の価値もないと思う。生きていく上で、生きることを理解しようとする上で、何の助けにもならないと思う。子どもにはもっと生き物に触れてほしい。死にもっと触れてほしい。ふおれすと鉱山の展示物に死の臭いがするものが多いのは、そういうことだからかもしれない。

過激かもしない。 でも、重要だと思う。

野生動物の生活をイメージできるプログラムや展示は、他の自然体験施設のものよりも過激に作られていると思う。動物が腐って土に帰っていく様子を展示する施設は少ないだろうし、抱卵する鳥の巣をのぞき込むプログラムをやる自然教育の団体も少ないだろう。多くはそれを許容できる教育体制ではないからだ。そんなことをすると保護者や自然保護団体からのバッシングを覚悟せねばならない。しかしそれは僕とて同じだ（もっと覚悟しているのはこのような活動を許容してくれている市の教育委員会だろう）。でも、そうして生と死に触れることが、人にとて成長のための重要な肥料になると僕は信じている。

text & photographs
檜山 知弘

施設デザインを担当するアートディレクター。だが、学生時代は野生動物の研究に明け暮れた。展示や発行物の作成だけでなく、動物を題材としたプログラムに力を發揮する。子どもたちはモモンガ博士の愛称で呼ばれるほど各方面の知識が豊富。NPO法人ねおすから派遣職員。



鉱山案内

小川邦夫的

鉱山近況

冬が近づき、山の木々も葉を落としカムイヌプリの稜線がはつきりわかるようになりました。冷え込んだ朝のグラウンドは霜柱が立ち真っ白になります。今年は雪の降るのがおそく、例年ですと雪化粧している山々も少しさびしそうな感じがします。

このところ、鉱山地区では蛾が大量発生しています。この

時期、この寒いのに蛾が何故とおもいますが、シャクガ科の蛾だそうです。（このフュンヤクガ、メスは羽がなく、フェロモンを出してオスを呼びそうです。飛んでいるのは全部オス？）

また、先日しばらくなぶりに大雨が降りました。川の水量も減つていて、恵みの雨でしたが、この嵐で民家の近くでアカマツの木が倒壊しました。ケガ人がなくてよかったです。アカマツはクラフトの材料として少しも使われてきました。（彼女に逃げられたわけではありませんから、そんなにガッカリするなよ。）

オープンから19ヶ月の活動報告

9月

2~3	白老町立竹浦小5年生宿泊学習
4~5	幌別小5年生宿泊学習
5	博物館研修
6~7	NPO法人ねおすツアー対応
9	幌別東小1~6年生遠足
12	登別小1年生生活科
17	登別小2年生総合
18	婦人大学
19	登別小4年生理科
21	主催事業「幌別川と魚たち」
23	主催事業「猛禽の渡り調査inカムイヌプリ」
24	幌別西小4年生
25	青葉小5年生理科
27~28	子どもたちの林間学校
28	室蘭児童相談所
30	青葉小2年生理科
30~10月 26日まで	ねおす学生実習受け入れ

秋の植物たちの営みを勉強するために、たねベルトをつけて、森を歩き回り、たくさんのたねを集めました。



婦人大学のみなさんと、鉱山町の旬の自然を見つけるながら、森林浴を楽しみました。野鳥や秋の植物をゆっくりと観察しました。



ふおれすと鉱山と市民の協働調査第二弾。カムイヌプリの頂上で渡りゆく猛禽たちを調査しました。猛禽たちの姿にみんなため息でした。



実働はじめた鉱山の森整備プロジェクト。今回は鉱山の森の姿を学び、どんな森を育っていくかを市民のみなさんと考えました。



新企画の親子プログラム。秋の遊びは、いろんな色の葉っぱを集めて、川に流したり、きれいな色の樹の葉でしおりを作ったり。



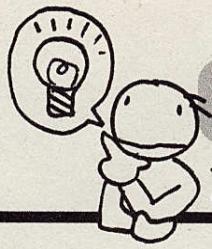
モモくら主催事業。ちょっと趣向を変えて、真っ赤に色づいたもみじを愛でながら、野点を楽しみました。外でいただくお茶は美味しいかった。

10月

4	キッズコーラス
7	幌別小3年生総合
8	幌別小4年生総合
13	幌別東小PTA
15	幌別東小1年生
16~17	道森林活用課視察
17	西陵中3年生職業体験受け入れ
18	若草小3年学レク
19	主催事業「鉱山の森をつくろう①」
21	青葉小4年生理科
22	登別小5年生図工
23	登別小2年生
25~26	子どもたちの林間学校
26	主催事業「落ち葉で遊ぼう」
26	モモンガくらぶ主催「野点を楽しむ」
30	登別小4年生総合

11月

5	北海道協働推進セミナー
16	主催事業「鉱山の森をつくろう②」
22~23	子どもたちの林間学校
26	ねおすツアー
30	主催事業「晩秋の動物たち」



使える？ふあれすと鉱山 小ネタ集③

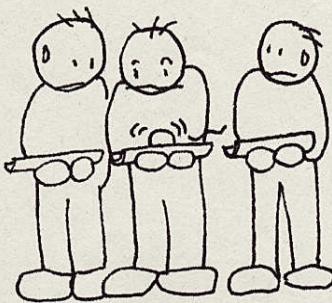
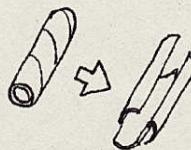
ふあれすと鉱山のプログラムは、小ネタ（アクティビティ）の連なり。
ここでは使えるアクティビティを特別にご紹介。

PA系ゲームあれこれ

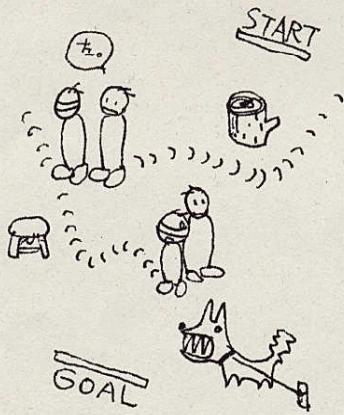
冒険から得られる教育効果を都市や学校内でも達成できるように考案されたPA（プロジェクトアドベンチャー）という教育手法の中から、いくつか面白そうなものをピックアップしてみました。大きなプログラムをはじめる前にみんなの雰囲気を一致させたり（トーンセッティング）スキンシップをはかって心のわだかまりを取り除く（アイスブレイキング）時に用います。いろんな可能性のあるネタだと思いますよ。

サランラップの橋

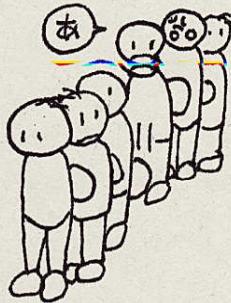
サランラップの芯とか印刷機のマスターの芯を縦に切り、一人一本持ります。全員で内側を向いて大きな輪を作り、その芯をとなりどうしでくっつけます。できあがった橋の上にピンポン玉を乗せ、手や指を使わないで一周させます。もし途中で落ちたら最初からやり直します。大人から小さな子まで簡単に取り組むことが出来ます。



目隠しリモコン



二人でペアを作り、一人が目隠しをします（耳はしっかり出しましょう）。部屋の端からスタートし、ゴールまでたどり着きます。目隠しをした人は、自分の判断では動くことができず、もう一人の指示（「右」「左」「ストップ」など）だけで移動します。床には服や椅子などの障害物がありますから、指示者はぶつからないよう的に声をかけてあげる必要があります。親子などをペアにすると面白く、実は案外お母さんが苦手だったりします。



いも虫ゲーム

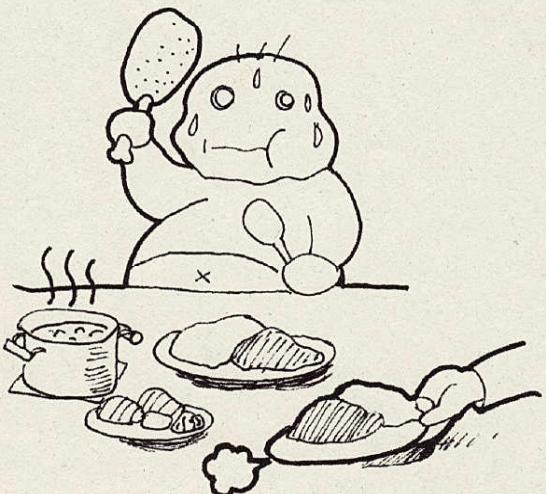
一列に並んで、前のこの背中と自分のおなかの間にドッヂボールをはさみます。手を使わないのでボールをはさんだまま、落とさないようにして部屋の端から端までを移動します。並び方や声のかけ方など、グループによって色々なバリエーションが出てきます。

どの活動にも言える事ですが、重要なのは「必要最低限のルールしか提示しない」ということです。あとは上手くいこうがどうなろうが、指導者はじっと参加者の心に生まれているドラマを観察することに努めるのです。「こうすればいいんだよ」なんておせっかいなことを言っちゃダメですよ。終了後、活動をやりっぱなしにせず「なぜ上手くいったのか」「どんな気持ちだったか」など、じっくり振り返ることが出来ると、このゲームをやった価値がぐんと上がります。

(上田 Program D)

③これ、余ったんだけど…

夏のハイシーズンになると、ぼくらは圧倒的にカレーライスとトン汁とジンギスカンの摂取量が増える。施設を利用している方が作ったものを頂戴するのであるが、その味はけっこう複雑だ。確かに、ピンボウなぼくらにとって、その施しは食事代節減に大きな貢献をしてくれているのは、明確な事実だ。しかし。各自持参の食事を済ませた後だと、これから食事の予定がある、というときに限って「これ、食べて」と勧められたりして、かといってムゲに断ることもできず、結局ハライッパイ食べることになる。そりやおいしい、といえばおいしいのだが・・・まあこれぐらいなら許されるのであるが、「これ、作ってみたんだけどさあ、おいしくないのよ。捨てるのもったいないから、食べて」と差し出されたときは、さすがにどうしようか考えた！しかし、結局お金がなくて昼食を買ってこれなかつたぼくは、顔で笑って心で泣いてありがたく頂戴するのである・・・(U)



冬のモモンガの暮らし えんどうめぐみの森のひみつシリーズ⑦



顔の半分くらいを占めるつぶらな眼、もこもこしたしっぽ、滑空することのできる皮膜の持ち主。その名は、エゾモモンガ。その愛らしさにファンも多いはず。

エゾモモンガはタイリクモモンガの1亜種で、北海道全域に生息している夜行性動物。夕暮れ時になると起きだし、巣穴からヒョコッと顔を出してまわりの様子を窺います。しばらくすると、スルッと巣穴から出てきます。同じ巣穴から出てくるのは、1頭だけとは限りません。何頭か同居している場合も多いのです。しかも同居人は血縁関係がある者ばかりではなく、縁もゆかりもないものどうし。巣穴を出ると、大体決まった場所でおしつこやうんちをします。そして、えさを求めて、森の中へ出かけるのです。

鉱山町にも、秋になるとモモンガが集まつてくる樹洞があります。晩秋になり寒さも本格的になると、巣穴から巣材の木の皮が見えるようになります。どうやら、この巣材、カーテンの役目をして寒気をガードしているようです。晩秋の夕暮れ時には、巣材カーテンをヨイショとよけて、顔を出す姿が観察されます。一日中降り続くような大雨の日には、巣穴が水浸しになるのか、途中雨にぬれるのがいやなのか、いつもの巣穴には戻つてこないこともあります。じっくり観察していくと、その「人となり」、もとい「動物となり」が分かってきて、とてもいとおしくなってきます。

実は、エゾモモンガは身近な森の住人。うんちを見つけたら、近くの樹洞を静かに観察してみてはいかがでしょうか。

リレーエッセイ Roots and Shoots リトル・ヴォイス

鉱山町とわたし

志水 昌子

鉱山との関わりは「鉱山研修センター」時代にボイスカウトでキャンプを利用するくらいでしたが、新しく「ふおれすと鉱山」となり、モモンガくらぶが設立されてからはボイスカウトよりモモンガくらぶとしての関わりが多くなっています。

モモンガくらぶでいい仲間に出会えたことは、私にとってとても素晴らしいことでした。みんな、自然が大好きで登別が大好きな仲間です。そして、登別にこれほどの自然があり、動植物がこんなにもあることも知りませんでした。鉱山の自然を知れば、みんなに教えたいようなこのまま置いておきたいような不思議な感じがします。例えば、モモンガに会えることを教えてあげたい。でもモモンガにとってはどうなんだろう??と考えてしまいます。

沢登りや、登山、歩くスキーなど興味はあっても、なかなか自分からはしなかったけれど、モモンガくらぶとして関わってきて、自分自身とても楽しく自然と遊んでいるような気がします。

それに、ふおれすとの行事に参加して、スタッフと話をしていて、自分のプログラムの幅も広がりました。いろいろな体験活動の中にたくさんのヒントがあり、子どもたちに返していくプログラムのアイディアが次々に浮かんできます。

ふおれすと鉱山は「とても楽しいところ」。気後れしないでどんどんみんなが遊びに来てくれたらしいと思います。みんなで鉱山を、森を作っていくみたいです。ただ足が無いのがちょっと残念なところですよね。子供達が自分達で気軽に来れるようなところになってくれればいいですね。



支援組織「モモンガくらぶ」会計。仕事の他にボイスカウトの隊長を務めるなど、多忙ながら、ふおれすと鉱山の事業もサポートしている。生糸の地元っ子。そのためか、持っている地元の情報やネットワークはかなりのものだ。



「真昼の死闘」
1970年アメリカ
監督：ドン・シーゲル
CIC配給

オススメ MOVIE from STAFF

「真昼の死闘」は当時（60年代後半）流行のマカロニ・ウエスタンを意識し、作られたと思います。邦題のいい加減さにはあきれますが、娯楽作品としては超一級の仕上がりです。監督ドン・シーゲル。主演はシャーリー・マクレーンとクリント・イーストウッド。音楽はエンニオ・モリコネ。当時、監督は全く無名。イーストウッドはまだローハイドのイメージが強く、S・マクレーンの西部劇というのも意外な感じがしました。メキシコを舞台に、ひと稼ぎ自論む流れ者と尼僧？の大活劇です（やらると、ダイナマイトが炸裂します）。尼僧役のS・マクレーンが最高です・・・。C・イーストウッドとのコミカルな会話に大笑します。結末がまた、いいんです。その後、監督のドン・シーゲルはダーティーハリーで一躍有名になります。（O）

EVENT INFORMATION

ふれすと鉱山の主催事業

イベントチェック

1/9(金)~12(月)	冬休みも遊ぶぞ! イベント盛りだくさん スペシャルウイーク
1/24(土), 25(日)	調査企画「鉱山の森とフクロウ」
2/1(日)	にちようびはふれすとたいむ② 「ゆきであそぼう」
2/14(土)~15(日)	雪中キャンプ高学年
2/22(日)	コーナン全開遊び「冬は雪遊びだ!」
2/28(土)~3/1(日)	雪中キャンプ中学年

こんどの冬休みも
スペシャルウイークだ!!

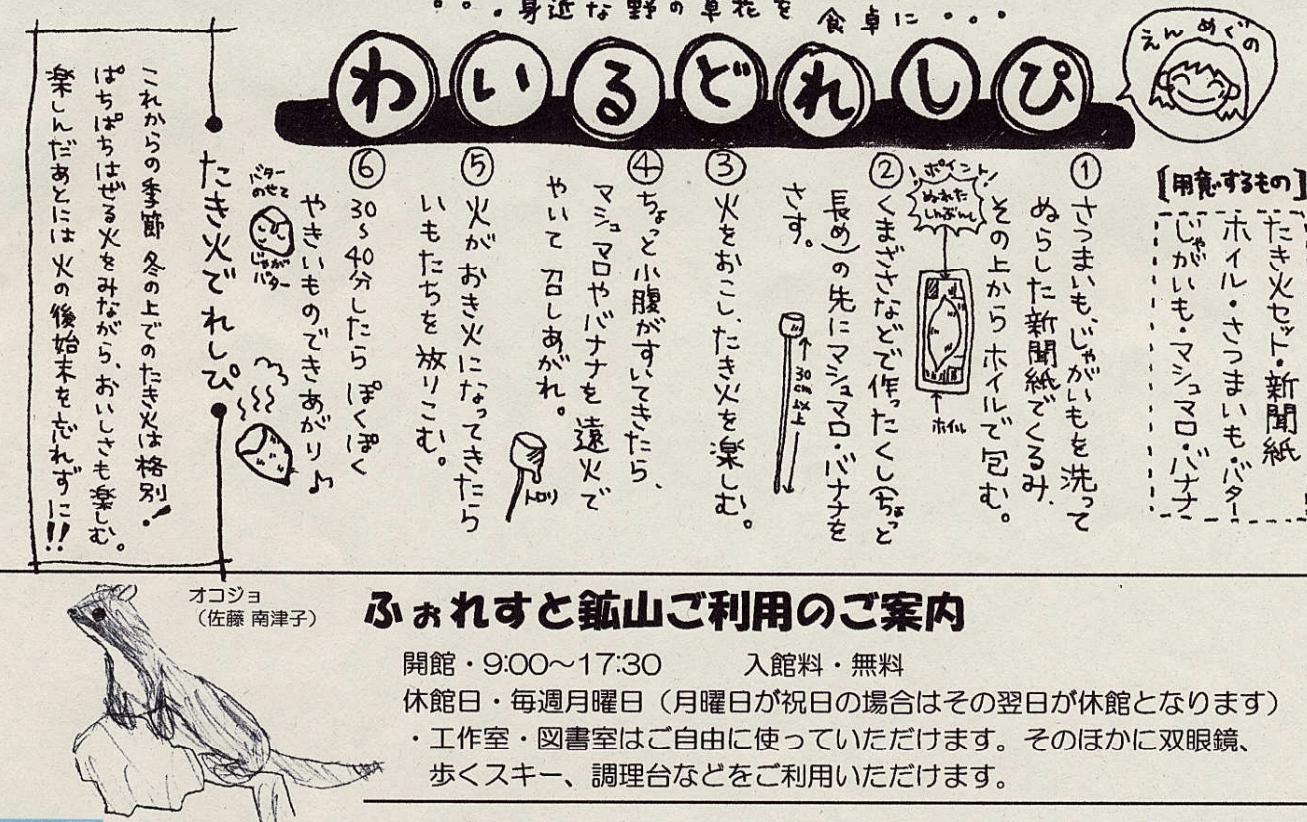
冬もやります! スペシャルウイーク。今度
は冬に良く似合う遊びをたくさん用意して
お待ちしています。

- 1/9(金) ランプシェードづくり、
魚拓教室、くまかるたなど
- 1/10(土) 油絵遊び、
ドリームキャッチャーブル
- 1/11(日) ポーセラーツ(陶器の上絵つけ)
歩くスキー教室など
- 1/12(月) 草木染め教室、雪上かるた
もちまきなど

イベントのお問い合わせ・お申込みは「ふれすと鉱山」
TEL.0143-85-2569 FAX.0143-81-5808

まで、お気軽にどうぞ。

。。。身近な野の草花を食卓に。。。



ふれすと鉱山ご利用のご案内

開館・9:00~17:30 入館料・無料

休館日・毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日が休館となります)

・工作室・図書室はご自由に使っていただけます。そのほかに双眼鏡、
歩くスキー、調理台などをご利用いただけます。

EDITOR'S LOUNGE

雪が降らない。僕にとっては相当なショックだ。多くの人は雪かきの難から逃れているのが本当の所だろうが、僕にとっては一年間待ち焦がれた雪なのだ。地球の温暖化だの何だのはさておき、僕の雪遊びまで奪われてしまうのは問題だ。さすがにこれは何とかしなければならないと思う今日この頃。雪遊びしたいなあ。

おくづけ

登別市ネイチャーセンター通信誌「鉱山録」 Vol.7

発行: 2003年12月

発行所: 〒059-0021 北海道登別市鉱山町8-3

電話番号: 0143-85-2569 FAX: 0143-81-5808

E-Mail: kouzan@pluto.plala.or.jp

URL: www.city.noboribetsu.hokkaido.jp/forest/index.htm